

J-PARC 3-50BTラインにおける 光学系の調整

- J-PARC
- ・3-50BTライン
- ・分散関数測定と調整
- 新たなβ関数測定手法の考案
- β関数の測定結果
- ・まとめ

<u>原田寛之</u>^{A)}, 明午伸一郎^{A)}, 白形政司^{B)}, 佐藤洋一^{B)}, 田村文彦^{A)}, 手島昌己^{B)}, 橋本義徳^{B)}, 五十嵐進^{B)}, 小関忠^{B)} ^{A)}JAEA/J-PARC, ^{B)} KEK/J-PARC 第10回日本加速器学会年会、2013年8月3日(土)

J-PARC (JAEA & KEK)

400 MeV H⁺ Linac [181 MeV at present]

Selling and

3 GeV Rapid Cycling Synchrotron (RCS)

Neutrino Beam⁴Line to Kamioka (NU)

> Materials & Life Science Facility (MLF)

50 GeV Main Ring Synchrotron (MR) [30 GeV at present]



Hadron Experimental Hall (HD)

J-PAF RCS &	RC MR RC	To MLF S To MLF	MLF MR
	RCS	MR (FX / SX)	
周長	348.333 m	1567.5 m	
入射エネルギー	181 (400) MeV	3.0 GeV	
出射エネルギー	3.0 GeV	30 GeV	
サイクル	0.04 sec	2.56 / 6.0 sec	<大強度陽子加速器>
設計出力	0.6 (1.0) MW	0.75 / 0.1 MW	・空間電荷効果等によりビーム出力に
物理アパーチャ	$> 486\pi$ mm mrad	$> 81\pi$ mm mrad	対して非線形にビームロスは増大
コリメータアパーチャ	324π mm mrad	54π mm mrad	• 機器の放射化を防止するため、コリ
コリメータ許容量	4 kW	2 &2 kW	メータでビームロスを局所化
現在供用出力	0.3 MW	0.22 / 0.02 MW	• ビームロスがビーム出力を制限
瞬間最大出力	0.54 MW		

3-50BTライン

- ✓ ビームロスさせないようにビームサイズをアパーチャ内に輸送
- ✓ 下段の加速器(MR)の入射点で光学系ならびに軌道をマッチング
- ✓ 上段の加速器(RCS)から出射されたビームのハローを所定のエミッタンスまで コリメータで整形
 - ① コリメータ領域での分散関数ゼロ($\Delta x = \eta \Delta p/p$)



分散関数測定

<Knob> RCSの取り出し運動量 (p/p)

<Monitor> ビーム重心(x / y)

- BPM:14台 - プロファイルモニタ:8台

運動量の変化に対するビーム重心の 応答から

$$\eta_x = \frac{\Delta x}{\Delta p/p_0} \qquad \eta_y = \frac{\Delta y}{\Delta p/p_0}$$

分散関数(η_x or η_y)を測定した





分散関数測定と補正量導出

- ✓ 水平方向の分散関数(η_x)において計算値(実線)と測定値(点)で大きな差が生じた
 ✓ 最上流の4箇所の測定点と4台の四極電磁石を用いて計算モデル内で再構築(点線)
 - ノブ: QDE1, QFE1, QDE2, QFE2の電流値、モニタ: 4箇所の分散関数測定値



補正後、分散関数測定

4台の四極電磁石の補正量

QDE1:109.8%, QFE1:94.1%, QDE2:94.2%, QFE2:99.8% 補正によってライン全体における計算値と測定値が概ね一致 ⇒ コリメータ領域における分散関数をゼロにした



β関数の新たな測定手法(1)



輸送ラインにおける輸送行列Mとビームの位置xと傾きx'は、

 $\begin{pmatrix} x_m \\ x'_m \end{pmatrix} = M \begin{pmatrix} x_1 \\ x'_1 \end{pmatrix} \qquad M \begin{pmatrix} S_1 \mid S_m \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} m_{11} & m_{12} \\ m_{21} & m_{22} \end{pmatrix} \qquad m_{12} = \sqrt{\beta_1 \beta_m} \sin(\phi_{1m})$

ステアリング等による蹴り角∆x'に対するモニタでのビーム重心の変動∆xは、

$$\Delta x_{1m} = \sqrt{\beta_1 \beta_m} \sin(\phi_{1m}) \Delta x'_1 \qquad \Delta x_{2m} = \sqrt{\beta_2 \beta_m} \sin(\phi_{2m}) \Delta x'_2$$
$$\frac{\Delta x_{1m}}{\Delta x'_1} \frac{1}{\sqrt{\beta_1}} = \sqrt{\beta_m} \sin(\phi_{1m}) \qquad \frac{\Delta x_{2m}}{\Delta x'_2} \frac{1}{\sqrt{\beta_2}} = \sqrt{\beta_m} \sin(\phi_{2m})$$

$$\Delta\phi_{1m} = \phi_{12} + \phi_{2m} \quad \mathbf{O} 関係を代入し、整理すると$$
$$\beta_m = \left\{ \frac{\frac{\Delta x_{1m}}{\Delta x'_1} \frac{1}{\sqrt{\beta_1}} - \frac{\Delta x_{2m}}{\Delta x'_2} \frac{1}{\sqrt{\beta_2}} \cos(\phi_{12})}{\pm \sin(\phi_{12})} \right\}^2 + \left(\frac{\Delta x_{2m}}{\Delta x'_2} \frac{1}{\sqrt{\beta_2}}\right)^2$$

β関数の新たな測定手法(2)





> 測定値(蹴り角に対するビーム重心の応答) $\frac{\Delta x_{1m}}{\Delta x'_1}$ $\Delta x'_1$ $\Delta x'_1$ $\Delta x'_1$ $\Delta x'_2$

"3ステアリング・フィッティング法"



$$\phi_{12}' = \phi_{12} + \Delta \phi_{12}, \quad \phi_{23}' = \phi_{23} + \Delta \phi_{23}, \quad \phi_{13}' = \phi_{13} + \Delta \phi_{13},$$

$$\frac{\Delta x_{1m}}{\Delta x'_1} \frac{1}{\sqrt{\beta_1'}} \sin(\phi_{23}') + \frac{\Delta x_{3m}}{\Delta x'_3} \frac{1}{\sqrt{\beta_3'}} \sin(\phi_{12}') - \frac{\Delta x_{2m}}{\Delta x'_2} \frac{1}{\sqrt{\beta_2'}} \sin(\phi_{13}') = A_m$$



χ²が最小値~0となるように5つのパラメータ (β,φ)を測定の応答(Δx/Δx²)から見積もる



- ✓ ビーム幅の測定値は用いず、ビーム重心の測定値のみを用いるため、 分散関数などの影響がない。
- ✓ プロファイルモニタのみならずBPMにおいても測定可能である。
- ✓ 蹴り角に対するビーム重心の応答は線形であり解析が容易である。
- ✓ 測定値の系統的な誤差となる電磁石の蹴り角の不定性は容易に求められる。
- ✓ 3台以上の電磁石があれば、電磁石の蹴り角に対するビーム重心の応 答のみ測定すれば良い。

3-50BTラインにおけるβ関数測定



β関数測定

<Knob>

水平方向3台(STR1:ESEP3, STR2:B01, STR3:PB) 垂直方向2台(STR1:Y01, STR2:ZSV01)

※ 垂直方向は2台しかないため、"3ステアリング・フィッティング法は使えない。

<Monitor>

ビーム位置検出器(BPM):14台

ビームプロファイルモニタ(PM):8台

測定結果 $(x/\Delta x')$



STR1の蹴り角に対する BPMでの検出ビーム重心

STR2の蹴り角に対する BPMでの検出ビーム重心

STR3の蹴り角に対する BPMでの検出ビーム重心



"3ステアリング・フィッティング法"によるβやφの 見積もり(水平方向のみ)



β測定時、STRsでのβとSTR間の位相差

Parameter	Calculated Value	Estimated Value	
βx@STR1 [m]	22.51	22.01	
βx@STR2 [m]	21.52	22.14	* 垂直方向に関しては
βx@STR3 [m]	25.35	24.37	計算値を使わざるを得
Δφx (STR1-STR2)	0.0600	0.0629	
Δφx (STR1-STR3)	0.1063	0.1155	
Δφx (STR2-STR3)	0.0463	0.0526	
	計會店	又相店 "っっこ	マロッグ・ファッニッ・ガネッ

百异胆

B測定結果

予想値 "3ステアリング・フィッティング法"

\mathbf{r}					
•	Monitor	βx [m] by STR1-2	βx [m] by STR1-3	βx [m] by STR2-3	
	BPM1	13.54 ± 0.22	10.67 ± 0.04	12.22 ± 0.35	
	BPM2	35.44 ± 0.77	33.63 ± 0.14	51.34 ± 2.15	計算値より
	BPM5	53.56 ± 0.96	55.82 ± 0.25	84.74 ± 2.99	」 等田し/こp
	BPM1	13.94 ± 0.22	14.14 ± 0.05	14.14 ± 0.28]
	BPM2	37.70 ± 0.76	37.29 ± 0.13	38.56 ± 1.13	▶予想値より 道山」 たの
	BPM5	57.43 ± 0.93	57.43 ± 0.22	58.57 ± 1.46	待山し/こり

分散関数補正後、 分散関数測定とβ関数測定



✓ 垂直方向の測定されたβ関数は「参考値」でしかない
 ✓ 水平方向の測定されたβ関数は計算値と概ね一致

まとめ

- J-PARC MRにおけるビーム出力増強に向けて3-50BTラインの コリメータによるビーム整形は重要である。
- 3-50BTラインにおけるコリメータの性能を十分に発揮するためには、コリメータ領域の「分散関数をゼロ」に調整し、「β関数を把握」しなければならない。
- 分散関数の測定を行い、モデル計算に基づいた調整手法を 確立した。
- 新たなβ関数測定手法と"3ステアリング・フィッティング法"を 考案ならびに確立した。水平方向に関しては把握できた。
- 今後、新規モニタや垂直方向のステアリングを追加し、ライン 全体における光学系の理解やモデル計算に基づく制御を実 現させる。
- RCSからの取り出しビームのハローを定量的に議論可能となるため、様々なパラメータの最適化を行い、ビームハローの低減を目指す。

Back up

Fudge Factor estimation of steering magnets



- 1. SteeringとBPMの間のQMをOFFして、蹴り角θに対する位置xの応答を測定
- 2. SteeringとBPMの位置Sと上記1での応答より蹴り角のFudge Factorを測定



STR Name	Fudge Factor		
ESEP3@3N	0.970		
B01@3N	0.961		
PB@3-50	0.880		
Y01@3N	1.066		
STR1@3-50	1.062		

 $0.29283[mrad/A] \Rightarrow 0.25762[mrad/A]$